

土屋道雄氏「天皇論の系譜」(笠原書房)を拜讀せり。

天皇・皇室にかかはる古(へ)よりの論議を、かくも見事に一覽に供したる著作はかつて世に問はれたるなし。

本書は、皇室論議を「明治時代以前」「明治・大正時代」「昭和前期」「占領下の天皇論」「昭和中期」「昭和後期」「平成の天皇論」の七つの期間に分けてあり。而して、當該の期間に屬する著作を題目に掲げ、論評を加ふ。

就中、なかんづく「占領下の天皇論」より後は、我らが記憶に残る著名なる知識人が、あるいは國體を護持せんと圖り、あるいはこれをして崩壊せしめんと企みて、如何なる發言をなしたるか克明に紹介す。

とりわけ著者の力點を置きたるは、敗戦後の知識人の變節なり。自ら言論界の寵兒たらんと欲するの餘り、水に落ちたる犬を叩くが如く、皇室を誹謗中傷せる者少なからず。著者は、かくの如き變節漢の卑劣を糾弾してあり。槍玉に擧げられたるは、羽仁五郎、加藤周一、高倉テル、宮澤俊義、丸山眞男、井上清、家永三郎の類なり。

戰時中、不敬のゆゑを以て彈壓を受けたる津田左右吉は、時局便乗派、之を期待の星として迎へたり。天皇制を打倒せんがために、輿論の魁さきがけを努むるあらんと思はれたればなり。豈に凶らんや、津田は、雑誌『世界』に「建國の事情と萬世一系の思想」を寄稿し、「皇室は國民の皇室であり、天皇は『われらの天皇』であられる」と喝破して、輕佻浮薄の人々の度肝を抜く。

八月十五日を境にして、昨日まで神と仰ぎ奉りし主上を、今日は口を極めて罵倒する知識人。その廉恥を破りて顧みざる、嗚呼、これぞ戦後日本の精神的暗黒の濫觴らんしやうたる。

平成の世にありても、あるいは近隣諸國、あるいは進歩的マスコミに阿おもねつて、國を賣る人々の何ぞ多き。然しかりしかうして而、片や、これらを眞つ向より論破するに確乎たる定見による理論武装を以てし、自らの正義を貫く知識人あり。萬恒河沙ばんごうがしやの銀漢に砂金の混りたるが如くなれども、悉皆絶滅したるにはあらず。櫻井よしこ氏の如き、寔まことに津田左右吉の衣鉢を受け継ぎたる信念の人と仰ぎ視るべし。

壓巻は、福田恆存の文藝春秋(昭和三十四年五月號)に寄せたる「象徴を論ず」なり。是こゝに於て、福田は「政治的大權とは全く別のところで、國民感情のうちでは天皇は依然として神である」と斷言せり。

「我が意を得たり」と感嘆したるは、著者の三島由紀夫批判なり。三島は「英靈の聲」の中に於て、二二六事件に關與して處刑せられたる青年將校の英靈をして「などですめるぎは人間となりたまひし」と主上を恨み奉らしめたり。「人間宣言」によりて、天皇は神の座より降り、日本國は癒すに由なき瑕疵を負ひたる國と化したり、と三島は言ふ。

然りと雖も、土屋氏は、「一片の宣言などで初發以來の國柄が變るわけがない」と反駁し給

ふ。洵に、神の御自ら「朕は人なり」とのたまふあらんとも、神なる生物が、何條、人なる生物に變生するを得べき。一億赤子の戀闕の情亡びざる限りに於ては、いづれの日にか天皇は顯在の神として復活し給ふならん。

天皇を神と仰ぐは、絶對神(God)といふに非ず。限りなく尊き御身にましまして、國民の衷情の向ふ所(divinity; idol)といふに過ぎず。これをしも非科學的なるがゆゑに排斥すべしとは、幼兒のたはごとなり。非科學的なりと貶するは、これ即ち非科學的なるに非ずや。

かつて、森首相は「日本は神の國だ」と發言し、マスコミの反撥を招きたり。

マスコミは「天皇を現御神と信ずるは民主主義に背馳す」といふならん。

然則、ダライ・ラマを「神に選ばれたる特別なる人」と信ずるもまた、民主主義を空しうすとなるべし。

現に、中國政府、ダライ・ラマの定めたる後繼者を排除し、自ら別個の少年を選定して、天位覬覦を圖りてあり。この暴虐を、媚中の識者は、些かも非難するなし。是、すなはち、チベット弾壓に加擔するなり。剩へ、かかる人々の中には、我が萬世一系の皇統も女系を認むべしといふ者多し。目的はただ一つ、神聖たるべき君主の正統性を科學的に奪はんと陰謀を全うするにあり。

「天皇は神なり」といふは、偏へに信教の自由の範疇に屬す。日本國憲法を擁護する者、「天皇現御神論」の口を封ぜんとは、天に向ひて唾するに似たり。吾らは胸を張りて、「天皇を神と認むる自由」を主張せずんばあらざるなり。